

このびる座間丘陵にはさまれ、
區中央に蛇行する目久尻川で
区切られている。立地は、
標高二四〇三三mの緩斜面
をなす低地形である。本遺
跡の右岸丘陵面上には相模
国分寺跡や浜田駅家の一画
と推定される上浜田遺跡が
占地している。

発掘調査は、県立高等学
校建設に先立って実施され

1 所在地 神奈川県綾瀬市早川字新堀淵二〇三他

2 調査期間 一九八一年(昭56)一〇月～一九八四年(昭59)二月

3 発掘機関
神奈川県立埋蔵文化財センター

4 調査担当者 國平健三・長岡文紀

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 先土器時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

宮久保遺跡は、東西両面が南北方向にのびる座間丘陵にはさまれた丘陵南西側斜面に位置し、東側は谷面中央に蛇行する目久尻川で区切られている。立地は、

たものであり、先土器時代から江戸時代までの各遺構が複合して検出された。なかでも木簡と関わりをもつ奈良・平安時代の遺構としては、堅穴住居一五五棟・掘立柱建物六三棟・土壙四九基・土壙墓四基・溝状遺構一九条・柵列二条・井戸一基・旧目久尻川の護岸施設や階段施設一カ所が認められた。六三棟の掘立柱建物のほかにも中世柱穴群と複合した当該期の柱穴がほぼ全域にみられることから掘立柱建物の棟数は更に増加するものと思われる。

木簡は、旧目久尻川が丘陵斜面部へ最も入り込んだ舌状先端部の右岸崖面を削平して造られた井戸の玉石敷き面下層にあたる黒色粘質土層中から出土した。この井戸は、約一・五m四方の木枠組井戸枠と、その周辺部を約6×5m範囲の長方形状に玉石を敷き詰めたものである。木簡は、この玉石面下層を整地する際に搬土した黒色粘質土の中に混入したものである。

玉石敷き面上層からは奈良時代前半から平安時代後半までの土師器・須恵器・灰釉陶器類の杯・皿・碗・甕等の破片が七〇〇点以上出土し、井戸枠内の最下層からは埼玉県前内出一・二号窯期の須恵器甕片が出土した。平安時代後期の土師器・須恵器杯類の内外面には「石井」「石」「井」「中」「卑」「入」「入」「入允」等の墨書文字が多く認められた。また曲物の底に「寿」を線刻したものも検出されている。墨書文字をもつ平安時代後期の杯類は、天平五年(七三三)に近い時期に築造され、八世紀末から九世紀初頭に廃絶した井戸跡の

うえに投棄されたものであり、井戸とは直接関係するものではない。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「鎌倉郷鎌倉里□□□寸稻天平五年九月」
[輕マカ]

・「田令輕マ麻呂郡稻長輕マ真國」
] 250×22×9 051

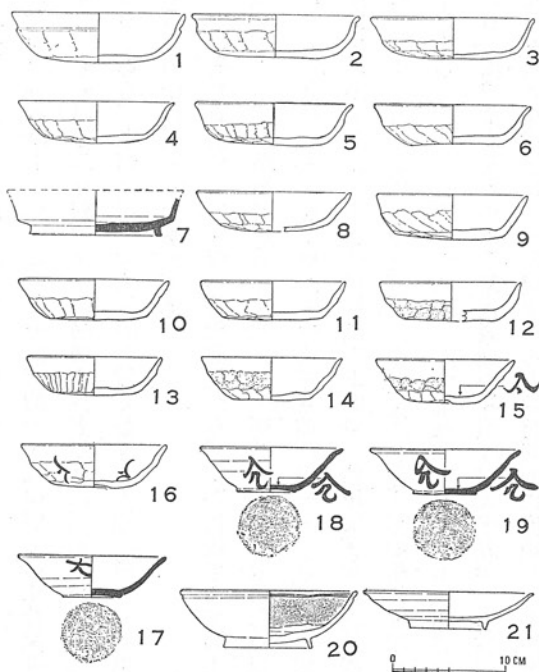
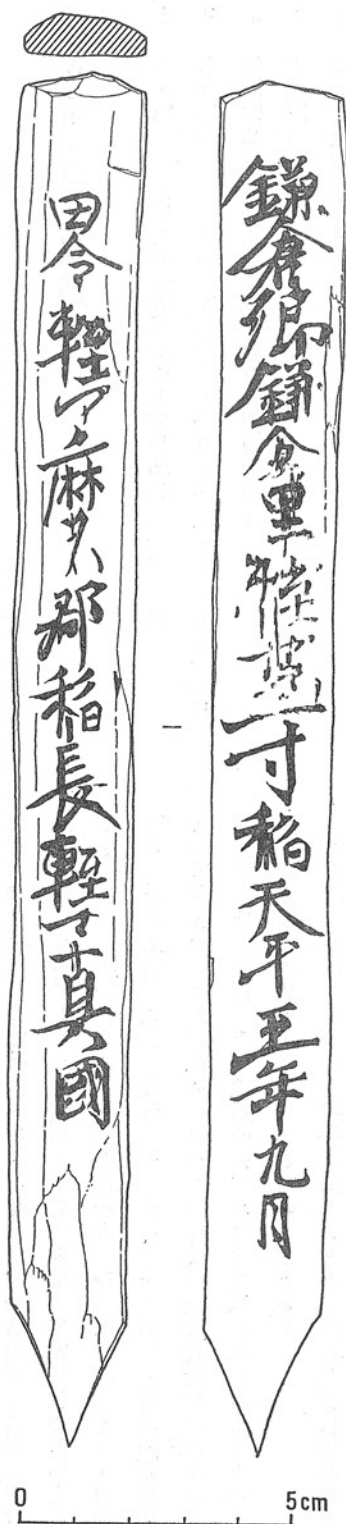
木簡は一点のみの出土で、下端を両側から山形状に鋭く尖らせた完形品である。形態からみて、付札と考えられる。

なお木簡の解説と积文は、国立歴史民俗博物館の平川南助教授に御指導いただいた。記して謝意を表したい。

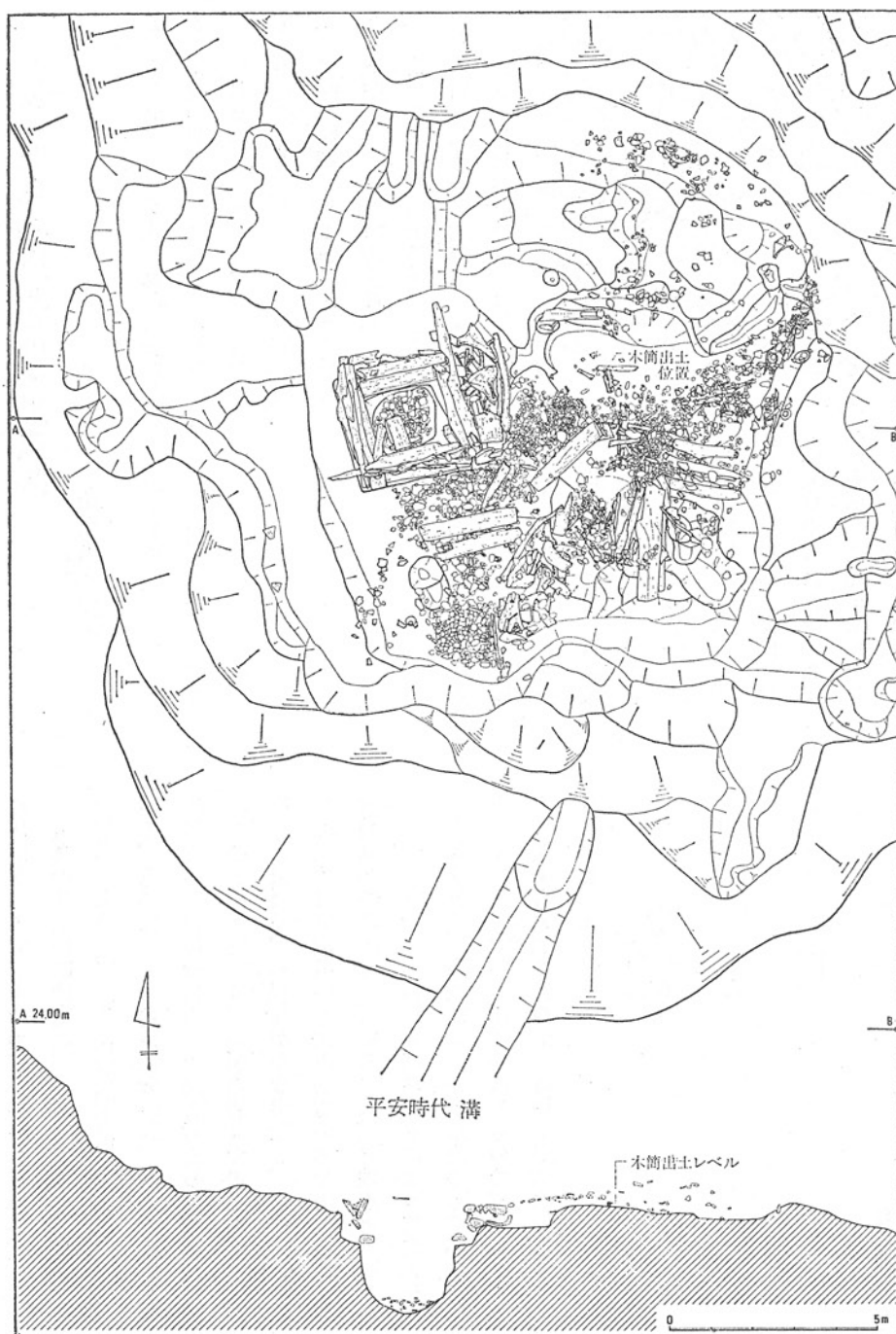
9 関係文献

神奈川県立埋蔵文化財センター『年報3』（一九八四年）

（國平健三）



井戸出土遺物実測図



井戸跡実測図